

目 記者の

井上卓弥
東京学芸部



「よみがえる安達峰一郎」

国際協調にささげた生涯

第一次大戦後の 秩序回復に貢献

つながらず信じる国際協調と
平和の実現に生涯をささげた
点にあると私は思う。

POCII所長への就任から
間もない31年秋、他ならぬ日
本の軍部が満州事変を起こ
し、連盟に調査委員会が設置

例えば、大戦後の民族自治
原則の下、欧州には新興諸国
が誕生したが、帝国を失った
ドイツ系などの少数者をめぐ
る民族対立も頻発した。安達
は連盟理事会の場で粘り強く
双方の当事者の説得、調停に
あたり、欧州に利害を持たな
い公平な立場で秩序の回復を
安定化に直接、貢献した。

また29年夏、巨額賠償金の
返済に苦しむドイツの負担軽
減策(ヤング案)が英仏対立
で頓挫しかけた際にも、その
外交手腕を駆使して忍耐強く
和解へと導き、危機を収束さ
せている。成果は日本の声望

を高めるが、直後の世界恐慌
が引き金となり、国際情勢は
一挙に暗転した。

POCII所長への就任から
間もない31年秋、他ならぬ日
本の軍部が満州事変を起こ
し、連盟に調査委員会が設置



第9回国際連盟総会(1928年)の日本代表として主要国代表と会談する安達峰一郎・駐仏大使(中央)＝安達峰一郎記念財団提供

どの重要な進展も少なくなか
った。歴史の不幸は安達にき
後、こうした後世の「常識」
を「遅れたきた帝国」日本が
学ぶためには、さらなる大戦
という過ちに自ら踏み込むし
かなかったことだろう。

シンプソウムを主導した柳
原正治・放送大学教授が編さん
した著作選「世界万国の平和
を期して」(東京大学出版会)
によれば、不戦条約に名を残
すフリアン・仏外相、ケロウ
米國務長官をはじめ、世界屈指
の指導者と安達とが、連盟理
事会や国際裁判の場で対等に
渡り合い、互いに尊重し合う
間柄だったことが分かる。

大書「国際連盟史」を著し
た連盟事務局の英国人、ウオ
ルター・スミス、欧州の第二次
大戦勃発に先んじて戦争状態に
入った日中関係について「の
ちの出来事(満州をめぐって
始まった戦争)に光を当てる
時、日本の自由主義は帝国主
義者の意図を隠す仮面にすぎ
ない」と断じられる」と論じつ
つ「しかし、幣原(重厚郎外
相)や安達のような人々の誠
意を疑うことはできない」と
最大級の賛辞を献じた。これ
が安達の国際的評価なのだ。

安達の情勢認識の正しさ
は、のちの歴史が証明してい
る。だに、日本で十分に知
られてこなかったところ、何
を意味しているのだろうか。

安達は、欧米列強による植
民地支配の実態や第一次大戦
の惨状を目の当たりにしてい
た。戦争違法化の歴史的意義
を理解せず「英米の覇権維持

の手段」「空虚な理想主義」
と一蹴した多くの日本人とは
次元を異にしていた。

自国第一に抗し
足跡に学ぶとき
戦争という破滅的手段を何
とか回避しようと努めた外交
官は他にも挙げることができ
る。しかし、そうした努力は
無に帰しただけであらう。現
在も十分に顧みられることが
ない不戦条約の戦争違法化
は、国際憲台憲章や日本国憲
法に引き継がれた理念でもあ
る。しかし、その事実も忘れ
去られているように見える。
安達をはじめ戦間期の心ある
外交官たちの忘却は、のちの
破綻に至る重大な失敗の根本
的な解明を、今日の日本がな
おも怠っていることの証左で
はないか。